

## モンゴルで起こっていること

そこで起こるのは、都市部における環境悪化、ゴミがひどい。ちょっと郊外に出ると、まだ原っぱなので、そこにゴミを捨てて対応していますが、やがて限界が来るのは必定です。

30万人の冬に備えて、ソ連時代に集中暖房的な設備が設けられましたが、増設が進まず、あとの人は、街の外側に遊牧民のテントを張って住みスラム化しています。そこには水道もガスも何もありませんから、川から水を汲み、燃料は中国から持ってくると思われる古タイヤを燃やして暖をとります。

モンゴルは1年のうち半分以上が冬の国柄です。10月～翌年5月迄は氷と雪に覆われるので、暖房は欠かせません。今年2月、私がモンゴルに居た時、最低気温の日は零下45度迄達しましたので、その寒さたるや外に物を出すと、すぐにカチンカチンに凍る程です。火を焚かなかつたら死んでしまいます。暖房のない人たちは、古タイヤを燃やして暖をとります。

古タイヤを燃やすと、ものすごい煙が出る。ウランバートルの冬の風物詩は10～20m先が見えないスモッグです。私は怖くてマスクをして外出しました。大気汚染が問題です。生活困窮者が仕事を求めて首都に来ますが、皆が仕事に就けるはずもなく失業者の増大。その失業による子育て放棄で、マンホールに住むストリートチルドレンが発生することが大きな問題です。

なぜ、マンホールに住むのか。30万人には発電所の発電時の熱で水を温めて街中に暖房を送るので、マンホールの中で温水が通る所に居れば、冬の間は凍死せずにすむからです。これら子どもたちは、かっぱらいをしたり、物乞いをしたりして生活している状況です。

それをなんとかしようとする日本のNGOが支援しますが、全てを救う状態ではありません。

## 青年海外協力隊員がしていること

私が1992年に、中近東のヨルダンに青年海外協力隊員として行った時のミッションは、パレスチナ系の人たちにコンピュータ技術を教えることでした。私の派遣とまさに一緒に派遣された仲間が3人おりまして、彼らがモンゴルにおける青年海外協力隊の初代隊員でした。モンゴルを最も早く援助した人たちで、手紙で私にモンゴルの状況を教えてくれました。

3人のうち2人は日本語教師、残る1人は婦人

子供服の縫製を教えておりました。市場経済下でモンゴル政府は、地下資源の活用、貿易等で生き延びようと、外国語教師を大勢求めた中に、日本語教師の需要があったわけです。以来15年を経て、現在多いのはストリートチルドレンの収容施設で働く協力隊員、保健衛生、病院のレベルも落ちたので、看護婦のレベルアップを指導する隊員、私のようにコンピュータを指導する隊員、勿論日本語教師もあって、今はいろんな分野に広がっております。

## 日本語を学んだモンゴル人

15年前は小学生に日本語を教えておりました。モンゴルの戦略は、小学生に日本語を教えて、大人になった時に国に役立つ人材にする。15年経った今、大学でコンピュータ技術へと進んだ学生が何人かおります。私の同期が15年前に日本語を教えた学生が、大学のコンピュータ学部を出て、昨年私が教え、卒業したうちの何人かは、日本のコンピュータ企業に就職してエンジニアとして働いております。

## モンゴルが抱える問題

燃料が少ないので、数少ない森林を破壊して燃料に使っていることに伴う異常気象の問題。中国による国境侵犯。今、韓国人と中国人がウランバートルに進出してビジネスを始めているので、モンゴルの小さな資本家たちの商売がつぶされている現状が、非常にまずい。

モンゴル政府は豊富な地下資源を基に人材を育成したい。その一つにコンピュータ産業を興したいというので、IT関係の大学を沢山つくっております。2005年にその計画がちょうど始まった時に、私が派遣されたので、ある程度お役に立てたと思っております。

## 帰国して感じたこと

コンピュータ技術者を何人か日本に派遣して、彼らを育てて欲しいという思いがあるようで、モンゴルの日本に対する期待は大きいです。また日本の相模界で成功しているモンゴル人が沢山おりますので、日本に行くことでサクセスストーリーを求める若者が多い。彼らと私が付き合う中で、伸びてゆこうとしている若者を見ていると、すごく気持ちよかったです。大阪市立大学大学院で日本の学生と話して、今の日本の若者は迫力がない。モンゴルの学生のほうがやる気があると思います。

モンゴルはこれからの国ですし、日本の支援をまだまだ必要としておりますので、モンゴルに目を向けていただければ幸いです。